

Akeny

新宿漢方堂 媚薬

泡蔵
AWAZO

序章	新宿歌舞伎町	4
第一章	噂	13
第二章	媚薬	55
第三章	変化	103
第四章	薬	155
終章	新宿漢方堂	193
あとがき		200

序
章
新宿歌舞伎町

序 章 歌舞伎町

夜空に煌く星を忘れてしまったかのように街は激しく光を放っていた。

美しく輝く星をかき消す愚行は、一体何時の頃から始まったのだろう。

人はそれを悪とは知らず、夜を光りに溢れる世界へ変えてしまった。しかし、それは先天的に闇を恐れる人間にとつての自衛本能、必然的な行為だったのかもしれない。

そして人が電気という闇よりも強い光を得て百数十年――

人々は色々な光りに溢れる綺羅びやかな街を闊歩していた。

大都会・東京――

闇を奪う街が世界中にある中、特に強い光を放つこの街は、年間を通して一日も休むことなく闇を消し続けている。

「眠らない街」として世界に名を轟かせる東京。その中でも異彩を放ち続ける街がそこにあった。

毎夜花火のように広がる艶めかしい光が街中に弾け、その輝きに引き寄せられた大量の人が群れをなして集まっては去っていく。

老若男女、人種を問わず一瞬の煌めきを求めて……

そこは魅惑に彩られた街〈新宿〉歌舞伎町――

「欲望の街」「金と暴力の街」と歌われる異界の地。黒い噂が絶えず聞こえてこようともし人の波は途切れることなく打ち寄せてくる。それどころか時代が混沌へ向かうにつれ、人々の足は吸い寄せられるように歌舞伎町へと向かっていった。満たされることのない欲望を埋めるために……

ある人は言う「全てを否定し、全てを受け入れる街」だと……

そして今宵も欲望を求める人々の足は歌舞伎町へと向けられていた。

金曜日、午前0時——

週末ともなれば路上には人が溢れかえり深夜になろうと途切れることはない。

そんな人達を見ていると人はまるで一つの星のようであった。道行く人は皆己を着飾り、奇声を上げ、強く輝こうとするが埋もれていく。

その繰り返し歴史を作ってきた。強い光を放つ星があれば集まり、失せれば離れていく。異質な光をうらやみながらも同じ光の中で安らぎを感じ群れをなす。同じ光の中にこそ安住の地があると知りながら僅かな違いを主張する人々……そんな歪んだ欲望を歌舞伎町は受け止めているのかも知れない。

同じ光を放ちながら異質だと信じ人は存在していた。

どんな光にもかき消されることのない強く美しい星が輝くまでは……

それはまさに巨星であった。人々は突如現れた美しい輝きに足を止め、振り返り、溜息をつく……

人々が羨望の眼差しで見つめる先には一人の美女が歩いていった。道の真中をゆっくりとただ悠然に……

そのなんの変哲もない緩やかな歩みにもかかわらず、人々は後ずさり道を開けていく。それはまるで海を割るモーゼを見ているようであった。

店頭から音楽が流れる中、時が止まったかのように人々は呆然と美女に見とれている。

真つ赤なチャイナドレスに身を包んだ美しい星の輝きを……

美女は街の灯りなどには負けぬ美しい光を放っており、それはさながら夜空に輝く月から舞い降りた天女のようにであった。透き通るような白い肌は艶やかに街の灯りを反射させ、本当に輝いているように見える。それに加え豊満で形のいい乳房が歩を進める旅に僅かに揺れ、細いウエストから腰に続く曲線は、どんな芸術家で

も描くことのできぬ淫靡なカーブを描いている。そんな神が作りし完璧な軀を真つ赤なチャイナドレスが引き立てていた。そして腰まで入ったスリットからスラリと伸びる脚が男達の……いや女も含め、そこにいる全ての者の視線を奪っていた。

人種のるつぼと化した歌舞伎町で、チャイナドレスなどさして珍しい服装ではないにもかかわらず、人々は遠慮のない視線を美女に浴びせかけている。

それは美しさだけが原因ではなかった。まるでピンクのベールを被っているかのように美女からは性の香りが感じられ、妖艶な風に吹かれた男の股間は膨れあがり、女に至っては頬を赤らめ虚ろな表情を浮かべている。

美は性別を超越する。そして美は性を感じさせないと言う言葉が嘘であることを人々は実感していた。男は皆、目の前の美女を抱きたいと思ひ、女はこの美女が抱かれるように犯されたいと考えていた。

今宵、新宿のホテルはすこぶる繁盛をすることだろう。

だが、天に輝く星を眺めるように誰一人として声をかける者はいなかった。他人に無関心な現代とはいえ、ここは新宿・歌舞伎町。これだけの美女を放っておく街ではない。もしこの美女を雇うことができれば、どんな店であろうと長蛇の列が途切れることはないだろう。それをわかつていながら勧誘員、快樂だけを求めるナンパ男でさえ声をかけずにいる。いや、かけられないでいた。

そんな人々の視線を一心に受け、チャイナドレスに身を包んだ女神は一直線に、一本の糸を渡っているかのようになんげ通りを抜けていく――

そして旧新宿コマ劇場前に出たところで、恐ろしくも愚行を行う者が現れた。

突如一人の男が動いたかと思うと美女の前に立ちはだかつたのである。

その暴挙に一瞬にして雰囲気は凍りついた。崇めている神を冒瀆されたかのように、男に鋭い視線が突き刺さっていく。

そんな殺意を向ける人々とは裏腹に、美女は華麗に歩みを止めるとわずかに口角を上げ、ゆつくりと男を見上げた。

男は特筆するところのない何処にでもいるサラリーマンであった。しいて言うなら身長が高いのと外見からは分からないが性欲が人一倍強いと言ったところだろうか。しかし、その体格に似合わず気の弱そうな容貌、そんな男がなぜこのような大胆な行動をとったのだろう。

しかし行動を起こしたはいいが緊張しているのか、顔を真っ赤に染めた男は、口をパクパクとさせているだけで言葉を発することができず、ただただ美女を見つめることしかできないでいる。

そんな滑稽な男の行動に、誰もがこの愚行が失敗に終わったと感じていた。

だが、そんな予想を裏切るかのように、美女は棒立ちになっている男の腰へ手を回すとそっと頬を胸に埋めたのであった。

そのかすかに見える表情は何年も待ち続けた恋人へ向けるように瞳が潤み、うっすらと頬を染めている。

「あ……あの……」

突然の美女の行動に男はなにが起こったのかわからず、更に軀を固くさせ戸惑った表情を浮かべることしかできないでいる。だが美女の行動に狼狽しながらも、強く抱きしめたいと思っていた。いや頭の中では既に犯すイメージまで浮かんでいる。それが愚かな妄想だとわかっていながら、人一倍精力の強い男には抑えきれない妄想であった。湧き上がる精力が男の足を無意識に美女の前に進ませていたのだから……

冷たくあしらわれると思っていた。それでも真正面から美女を見ることができればこんなに幸せなことはない。どんな覚めた視線であろうと真っ直ぐ瞳を見ることができたなら、永劫オカズには困らないと思っていた。

それなのに……

想像を遥かに超え、あろうことか男の胸に頬を寄せてこようとは……

「……………」

甘い香りが鼻孔をくすぐる。その香りを嗅いだ途端、男根だんこんはありえない程勃起し、美女の腹を押し返した。

「ハアアア……………」

硬くなった男根を感じた途端、美女は嬉しそうに胸の中から男を見上げ、甘くなった吐息を混ぜながら呟いた。

「お久しぶりございます。一ヶ月の間ずっとお待ちしておりました」

その切なげな声が男の興奮を更に大きくしていく。しかし、一体なにを言われているのかわからなかった。「待っていた」などと……………以前にもこの美女に会ったことがあるのだろうか？ いや、そんなはずはない、もし会ったことがあるのなら、これ程の美女を忘れるわけがないではないか。

「な、なにを……………あ、貴女とは始めて——」

「会う」と言おうとした時、なにか引つかかるものを感じた。そして美女の瞳を見ると、美女の香りを嗅いでいると閉じていた記憶の扉がこじ開けられていくのを感じる。

「いえ……………わたくし達はこの一年の間、毎月一度だけ愛し合って参りました。そして今日が13カ月目……………思いついてくださいますし」

潤んだ瞳が男を見つめ続ける。

その瞳、確かに見覚えがある。それは頭で記憶しているのではない。躰が、股間がその瞳を覚えているような気がした。そして人目をばばからず美女が硬くなった男根をひと撫でした時、男は全てを思い出したかのようにならぬ。

「そうだ。僕たちは毎月愛し合っていたんだ……………」

「その通りです。毎月13の日にわたくし達は熱い夜を過ごしてまいりました。さあ、今宵も貴方様の好きなよ

うにわたくしを愛してくださいませ」

その言葉に男の目つきが変わった。こんな美女にこんなことを言われ冷静でいられる男などいるわけがない。だが、男はなにかに取り憑かれたように焦点が崩れると虚ろな瞳を美女に向けた。

「そうだったね。僕はいつも好きなように君を抱いてきた。何度も何度も……君は僕のモノが好きだった……」

「貴方様の全てが好きです」

「そうじゃない。僕の……俺の男根コが好きなんだろ」

虚ろな視線を向けながら、男はいやらしい笑みを浮かべると大きくなった男根を腹に押し付けた。

「ハウツ……は、はい……熱くなった貴方様のモノが愛しくてたまりません」

男の胸に頬を寄せながら美女は小さな喘ぎ声をあげると震えた声でそう告げた。

「なんだ。もう感じているのか？」

「はい……」

そう言つて小刻みに躰をこすりつけながら更なる喘ぎ声を上げる。

「欲しいのか？」

「欲しい……です……」

欲情した瞳を向けると小さく頷く。

「この淫乱が。いいだろう。ここでやってみせろ」

「は……はい……」

神をも恐れぬ戯言に、美女は嬉しそうに微笑みながらゆっくり膝まづくとなんの躊躇もなくジッパーを下
げ、太く大きな男根を引き出した。

まさか多くの人が闊歩する歌舞伎町のど真ん中で……誰もがそう思う行動であった。しかも誰もが振り返る絶世の美女がこんなことを……

騒然となる。暴動が起きてもおかしくない状況——

しかし、誰一人として騒ぎ出す者はいなかった。それどころか、歌舞伎町の街は二人のことを忘れいつもの喧騒を取り戻し、異常な二人の横を通りすぎていくではないか。

これは一体どういうことなのか？　まるで世界が遮断されてしまったかのように人々の目にはもう美女と男の姿は写っていないかった。

「ウウウッ……」

そんな異変に気づくことなく、男の唇からうめき声が漏れ始める。

特別なことをしている訳ではない。ただ包むように両手で男根をしごき、亀頭を舐めゆつくりと啜え込んでいくだけである。しかし、男はそれだけでとつもない快楽を味わっていた。

いやらしい舌が男根を嬲りながら、美女もまた快楽を強めているのか悦楽の表情を浮かべている。小さな口を大きく開け、美味しそうに男根を根元まで啜え込んでいく表情のなんと卑猥なことか、もしこの表情を見る者がいたとしたら、それだけで射精してしまう男もいただろう。

そんないやらしい顔を見て我慢できなくなったのか、男はなんの遠慮もなく美女の口に精液を放った。

「ウッ、ウウウウ……」

美女は突如放たれた大量の精液に驚くことなく、むしろ嬉しそうに喉を鳴らし精液を飲み干していく。しかし、男の射精は異様に長い射精であった。その勢いに負けたのか唇から飲みきれなかった精液がこぼれ落ちていく。それでも美女は必死になって精液を飲み込んでいく。そして最後の一滴を飲み干した途端、美女は腰が砕けたかのようにその場に座り込んでしまった。

「ハアハアハア……」

熱い吐息を漏らしながら満足した表情を男に向ける。その顔を見た途端、男根は休むことなく膨れ上がった。

「……素敵……」

潤んだ瞳を男根に向けながら美女は再び膝まづくとき愛しげに手を伸ばす。だが男はその手を取って強引に引き寄せた。

「もう我慢できない。今度はぶち込んでやるからな」

そんな興奮で震える男の声を聞くと、美女の細腕のどこにそんな力が備わっているのか乱暴に抱きしめる男の腕など物ともせず、やすやすと引き剥がし呪縛から逃れ少し意地悪な笑みを浮かべながら囁いた。

「ここではいけません。最後はいつものところへ……いつものところで思う存分たくしを抱いて下さいませ……我慢できますね」

最後の台詞に男は興奮しているのも忘れ後ずさる。その絶対的な言葉に軽い恐怖を感じていた。

「あ、ああ……そ、そうだったな。あそこへ行かないとお前を抱くことができないんだ……」

これが今まで欲望をむき出しにしていた男の態度だろうか？ その怯えきった瞳は、まるで調教された飼犬のように従順であった。

興奮を瞳の奥底に押しやり従う男に満足しているのか、美女はゆっくり近づくと男の手を取る。

「いい子ですね。それでは参りましょう」

そう言つて男の手を引き歩き出す……それに従い男は幽霊のように歩幅を合わせ歩いて行く。

剥き出しの男根を最大限に勃起させた状態で……

そんな異様な状況が直ぐ側で行われていることに気づかぬまま、人々は今も歌舞伎町の街を賑わしていた。

しかし、見ることを忘れてしまったはずの美女の淫猥な甘い香りが漂っている歌舞伎町の街は、いつもにも

まして色めいていることに誰一人として気づく者はいないのだった。